Kobe Shoin Women's University Repository

Title	SIL Σ Events and Activities
Author(s)	
Citation	Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin , No.3 : 139-145
Issue Date	2000
Resource Type	
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

SILΣ Events and Activities

- 日本言語学会大会 開催
- 言語科学コロキアム
- 神戸松蔭女子学院大学大学院 設置

- General meeting of the Linguistic Society of Japan
- SILΣ Colloquium Series
- Kobe Shoin Graduate School

✏日本言語学会大会 開催

11月27・28両日にわたり，日本言語学会第119回大会が本学で開催されました。

第1日目は大会開会式で日本言語学会会長・柴谷方良 神戸大学教授の開会の辞，本学を代表して友枝重俊学長による挨拶の後，2会場に分かれてシンポジウムを行いました。

シンポジウム1は本学の郡司隆男教授が企画・司会の「科学としての言語研究の可能性」，シンポジウム2は井上京子氏（慶應義塾大学）司会の「言語と文化」で，いずれもほぼ満員の参加者を集め，活発な討議が交わされました。

1日目の夜は本学の学生食堂で懇親会が行われ，100人以上が参加，楽しい交流の時間を持つことができました。特にアルバイトで協力してくれた本学の学生たちが全国から集まった著名な言語学の研究者と親しく（というか臆面もなく）語らい，一緒にスナップ写真を撮っているすがたは印象的でした。

2日目は本学5号館で4会場に分かれ，朝から夕方まで全部で40の研究発表が行われました。日英仏などのなじみ深い言語の歴史的・共時的研究だけでなく，バンティック語，ネワール語，オリヤ語などについてさまざまな分野での研究発表が行われ，いずれの会場もほぼ満員で，熱い議論が戦わされました。

この大会は，現言語学会会長 柴谷方良 教授の会長としての任期最後の大会にあたり，この大会は是非とも神戸松蔭で行いたいというご希望に応えて開催を引き受けたものです。また本学の大学院が発足する時期に日本全国の言語研究者に本学を訪れていただくよい機会でもありました。

しかし，このような大規模な学会を本学で行うのは1991年の国際語用論学会以来のことで，また今回大会準備に関わった者はほとんど91年の経験のないもので，全員が手探りで準備にあたり，不安の中で夢中の努力をせねばなりませんでした。

結果としては，近年の言語学会大会の中でもっとも盛況で成功した大会であったという評価を頂けたと思っております。また多くの人々がこの大学の施設や環境によい印象を持って帰って下さったと自負しております。

この大会を本学で開催したことのもっとも大きな意義は，20人以上の松蔭生が，大阪大学，神戸大学の大学院生とともにアルバイトとしてこの学会に協力してくれたことだと思います。参加者の受付と応対，委員会の準備と手伝い，発表会場の準備と補助などが主な仕事ですが，いずれの部署でも適切に，楽しく働いてくれました。

また，この機会を通して多くの研究者と交流し，これまでまったく無縁だった学会の雰囲気に触れ，楽しんでくれたと思います。「学会っておもしろい！」と多

くの松蔭生が言ってくれました。彼らの姿が学会に参加した人々の目に好ましく映ったことは想像に難くありません。

なお，この学会のスナップ写真集を言語科学研究所のウェブサイトで見ることができます。

http://sils.shoin.ac.jp/jpn/

のトップ・ページから入ることができます。かなり重いページで，時間がかかりますが，学会の楽しい雰囲気を伝えていると思います。

この大会を成功にみちびいた，大阪大学，神戸大学の大学院生，本学の教員，そして学生のみなさんにあらためて感謝と敬意を表したいと思います。

『学報』No. 28 より再掲

✏言語科学コロキアム

言語科学研究所主催の言語科学コロキアムが，今年度は 7 月に開催されました。日程・内容は以下の通りです：

第 1 回コロキアム

スピーカー　**米田 信子** 氏 (東京外国語大学大学院)
題　**フィールド言語学の実際**
—タンザニア，マテンゴ語を例に—
日時　7 月 17 日（土曜日） 15:00 より
場所　本学 131C 教室

フィールド言語学の実際
—タンザニア，マテンゴ語を例に—

マテンゴ (Matengo) 語はバンツー諸語のひとつで，タンザニア西南端のンビンガ (Mbinga) 県で話されている。この言語に関する書かれた資料はほとんどない。スワヒリ語の急激な浸透によって「危機言語」になりつつあるこの言語の状況を見ても，記述研究が急がれるところである。発表者は 94 年以来，マテンゴ語を記述するために現地で言語調査を行なっている。これまでに研究されていない言語を知るためには，語彙調査や文法調査だけではなく，社会言語学の調査や文化人類学の調査も必要になってくる。また対象言語だけではなく，その周辺言語や地域主要言語にも目をむける必要がある。ひとつの言語を記述するための具体的な調査の方法や問題点，また収集したデータの分析について，実際のデータを紹介しながら報告する。

✏神戸松蔭女子学院大学大学院 設置

神戸松蔭の大学院がついに発足しました。概要は本学教務課にあり，

http://sils.shoin.ac.jp/grad

で詳細と最新情報を見ることができます。

神戸松蔭のような伝統のある大学に大学院がなかったこと自体不思議だったとも言えますが，大学院が実際に発足するということで，在学生の間にも積極的な意味での影響が出ているように見受けられます。

神戸松蔭の大学院は文学研究科という，一見すると伝統的な器のように聞こえますが，実は新しいアイディアを数多く盛り込んだ，かなり先進的な大学院なのです。また，広く人材を受け入れるため，大学院は**男女共学**となります。（共学は大学院のみです。）ここでは，神戸松蔭の新しい大学院，おもに英語学専攻の特徴について，書いてみたいと思います。

神戸松蔭大学院の特徴を一言でまとめると，次のようになります。

1. 情報科学の成果を重視し，研究方法や研究指導に生かす。
2. 「教育機関としての大学院」: 体系的なカリキュラムで，基礎的研究方法や技能の指導を重視する。
3. 個人の志向を尊重した研究指導。

以下，それぞれの特徴について説明します。

1. 情報科学の成果を重視する

現代の言語研究ではコンピュータやネットワークを使いこなすことが必須条件です。この大学院では，それらの使用だけでなく，その背後にある情報科学の諸概念を体系的に学習できるようなカリキュラムを組んでいます。また情報科学の成果を人文科学の分野に生かす方法を追求することは，この大学院のベースラインをなすテーマでもあります。

勿論，情報科学を追究するには，それだけのハードとソフトの環境が必要です。この大学院では，従来の神戸松蔭の進んだネットワーク環境の財産に加えて,「大学院基幹ネットワーク」を設置しています。特に情報科学を重視する英語学専攻では，院生研究室に学生 1 人に 1 台，ネットワークの端末としてのパソコンを用意していますから，学生は常にこの充実した研究環境を利用することができます。

これによって，内外の情報を取り入れたり，ウェブサイトなどで情報を発信したりできるだけでなく，データベースを構築して共有したり，メールやウェブを利用した新しい授業形態 (‘virtual schooling’) も構想しています。

また，大学院のある 13 号館には，文系の大学院には珍しい「音響実験室」があり，ここで音声を入力してデジタル分析したり，心理言語学の実験を行い，その結果をコンピュータで解析したりすることができます。

2.「教育機関としての大学院」

大学院が教育機関である，ということは当たり前のことだと思っていませんか？従来の日本の大学院では，必ずしもそうとは言えないのです。神戸松蔭の大学院のコンセプトは,「教育機関としての大学院」です。その中身は「体系性」と「基礎的研究方法と技能の重視」です。

体系性

英語学専攻は，小規模ながら世界的なレベルで第一線の研究活動を続けている教員を言語研究の各分野に配して，音声・音韻，語形成，統語論，意味論，言語情報科学，心理言語学，社会言語学，歴史言語学，英語教授法，文化研究と，言語研究の領域をほぼ全面的にカバーしていますから，学生はどの分野を選んでも質の高い研究指導を受けることができます。

また，どの分野についても，1 年次では基礎的な授業，2 年次ではより専門的でオリジナルな研究につながるような授業を履修できるようになっていますから，立体的な構造を持ったカリキュラムと呼ぶこともできます。

基礎的研究方法と技能の重視

従来の大学院では，英語力やコンピュータの使用，データの収集や処理方法などは，もともと学生が備えているか，そうでなければどこかへ行って覚えてくる，というのが常識でした。英語学専攻では，このような研究に必要な基礎的技能や方法を積極的に指導します。

英語に関して言うと，リーディングだけでなく，英語で論文を書いたりその内容を口頭で発表したり，あるいは学会などでディスカッションしたりする力を養う授業を必修にして，厳しいトレーニングを行います。

コンピュータについては，実習の授業でさまざまなレベルの指導を行いますし，「実験言語学」,「フィールド・ワーク」,「統計」などで具体的な研究の基礎的方法を指導します。これらは，研究以外の分野でも社会で役立つ実務につながっている技能でもあるのです。

3. 個人の志向を尊重する

従来の文系の大学院は，研究者を目指す人が行くところでした。しかし，高等教育が普及しきってしまった感のある現代では，大学院へ進む人の動機は多様になっ

ています。

英語学専攻では，個人の志向 "course of life" に基づく，ゆるやかなコースを提案し，学生は自分の志向に即した履修のしかたを選ぶことができます。そのコースとは，次の 3 つです。

研究者志向コース：	研究者としての知識や技能を養うことを目的とします。
語学充実コース：	語学関係の授業を重点的に履修し，語学力を高めることを目標とします。
実務志向コース：	英語学の研究を通じて情報科学の成果である実務的な技能を養う。

それぞれのコースによって，授業の履修や学位を認定するための最終試験のかたちにヴァリエーションを持たせることができるのです。

勿論，このような個人の志向にあった指導を実現するためには，緊密な個人指導を，面談やネットワークを駆使して実行していくことは言うまでもありません。

神戸松蔭大学院では，常時メールによる問い合わせ，予約による見学や教員との面談を受け付けております。気軽に sils@sils.shoin.ac.jp までご連絡下さい。

General Meeting of the Linguistic Society of Japan

The 119th General Meeting of the Linguistic Society of Japan was held on 27–28, November, here at Kobe Shoin, with more than 3,000 scholars and students from all over the country participating. The meeting featured two symposia, one on Linguistic Studies as a Science, headed by Takao Gunji of Kobe Shoin, and the other on Language and Culture, led by Kyoko Inoue of Keio University, as well as 40 paper presentations on various topics from numerous languages of the world.

We are grateful to all who helped with the organization of this successful event, especially the graduate students of Osaka University, Kobe University, and the faculty and students of Kobe Shoin.

Some photos taken during those two days can be browsed at the SiLΣ website:

`http://sils.shoin.ac.jp/eng/`

SiLΣ Colloquium Series

This year we held a colloquium meeting on July 17. Guest speaker was Nobuko Yoneda of Tokyo University of Foreign Studies. Ms. Yoneda talked about her fieldwork methods and experiences doing research on Matengo, a language spoken in southwest Tanzania.

Kobe Shoin Graduate School

Year 2000 is a very special year for Kobe Shoin, as this is the year when its long-awaited Graduate School is inaugurated. The Graduate School has two departments: Department of English Linguistics and Department of Japanese Language and Literature.

The Department of English Linguistics focuses on the so-called 'core areas' of linguistic research while extending the scope to various fields related to information sciences.

In the Department of English Linguistics, students will receive intensive and systematic instruction in theoretical linguistics, as well as basic training in skills such as network management, desktop publishing, fieldwork, statistical methods for linguistics, and English language (for non-native speakers of English).

Information about the Graduate School can be obtained at the following website, though currently only a Japanese version is available:

`http://sils.shoin.ac.jp/grad`

Application from outside of Japan is welcome. For more information, e-mail to: `sils@sils.shoin.ac.jp`